



青森県教組養護教員部 2024.5.24.

折々のことば

鷺田 清一 3070

「コミュニケーションにおける多数決での合意形成は、負けた側の「屈辱や憎しみ」を増幅し、当のコミュニケーションを破壊しかねない。だから、そこでは反対意見の人も最終的に合流しうるような「妥協と意見のすりあわせ」が重要になると、文化人類学者は言う。まっ先に求められるのは「多数決よりも高度な政治的技量」と「対立を煽らない思慮深さ」だ。『人類学者のレンズ』から。

松村圭一郎

コンセンサスによって意思決定する社会では、採決は最悪の選択になる。

2024・4・28

総会に結集しよう

6月22日(土) 10~12時

県教育会館で養教部総会が開かれます。詳しい内容については同封した冊子をお読みください。たくさんの方が出席して下さることを望んでいます。

「集まれば元気！」にたれます。



〈お弁当が出ますので申込を県教組 017-734-7279まで〉

朝日新聞 2024年5月17日より

My Style

美しい歳の重ね方 生美人カ



日本人はなぜ脱いだ靴を揃えるのか？

脱いだ靴を当然のように揃えること、その素晴らしさに心が震えた……日本で働く外国人の言葉である。ハッとさせられた。いつの間にか身に付いていた私たちのこの慣習が外国人の心を動かしていたなんて。もちろん、慌てて脱ぎ散らかすこともあるけれど、そういう見方をされるのを知って、改めて靴を揃える大切さに気づかされ、身が引き締まる思いだった。

ただそれは「マナーを守っていること」以上に、「目に美しいこと」に対する賛辞でもあったはず。つまりわざわざ靴を揃えて、視覚に優しい景色を作りながら生きている、それが精神性も含めて素晴らしいということなのだ。そして、だから日本の人は心穏やかで他者への配慮ができるのだらうと、その人は言ったのだ。街にゴミを

捨てないことや、皿の上の食べ残しも見苦しくないようにすることが、心の穏やかさにつながっていると。実際に、書類の四隅をトント揃えると「尖った角を減らすこと」になって、実は心理学的にストレスを減らせるという。

言い換えるなら、日々の当たり前の生活の中でどんな景色を自分自身に見せているかで、心の向きを少なからず変えられるということ。身に付ける色によって気持ちを操ることができるのと同じように、それも生き方のテクニックになるのだ。だからこそ、人はキレイに片付いた部屋で生きるべきなのだ。誰も見ていない自宅の玄関でも、脱いだ靴をきれいに揃えておく、それは自分自身のため、美しい心で生きるための大切なコツなのである。



このエッセーがおもしろいと思いました。私は「キレイに片付いた部屋で生きるべき」とは思いませんが、キレイにしている方が心穏やかに暮らせます。

天声人語

先日の訃報が心に残り、母の日にあたって星野富弘さんの詩を思い出している。〈神様がたった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら母の肩をたたくせてもらおう／風に揺れる／ペンペン草の実を見ていたら／そんな日が／本当に来るような気がした〉▼体育教師だった星野さんは24歳で大げがをし、首から下が動かなくなった。つきつきり世話をしてくれる母にさえ、絶望から怒りを爆発させてしまう。自分一人では一生、何も出来ないのか▼生きる意味を教えてくださいましたのは、それまで気にもとめていなかった野の草花だった。へこの花は／この草にしか／咲かない／そうだ／私にしか／できないことが／あるんだ。口にくわえた筆で四季の花々を描き、言葉を添える。初めて出来た時、絵というより希望が浮かび上がった、とふり返っている▼作品に多くの人が勇気づけられたのは、そこに人間の限らない強さとやさしさがあるからだろう。小さな命をいとおしみ、目に見えぬ何かに感謝する。入院中に洗礼を受けた信仰の力もあつたに違いない▼享年78。先日訪れた群馬県みどり市の富弘美術館では、記帳のノートが「ありがたう」の文字で埋まっていた▼著書に書いている。「散ってゆく花の横に、ひらきかけたつぼみがあり、枯れた一つの花のあとには、いくつもの実がのこされます。人間が生きているという事は、なんと、ひと枝の花に似ているのでしょうか。星野さんが残していった種の一つひとつを思う。」

2024・5・12

子どもたちの動き、表情などしつかり観察したいですね。熱中症にも注意、やりすぎ注意です。



星野富弘さんの詩画がとても好きでした。毎年カレンダーを購入し、今でも毎日眺めています。保健だよりを製本した時の表紙は、いつも富弘さんでした。私にとっては生活必需品のようなものでした。お会いしたことはありませんが、おつと隣りにいて下さったような気がします。七くなられてとても残念です。ご冥福をお祈りいたします。

文責 阿部陽子 スマイルサポート(017-722-3749)

12 校医先生と

年一回検便 したんだ



検便は一年に一回だけでしたが、この学校は、校医先生を中心に年三回の自主検便をしました。

保健室、理科室が検査場になり校医先生と一緒に顕微鏡をのぞき、寄生虫卵の様子をしらべました。

0%までつづけました。

13 自分の

健康の記録 大切です。

子ども達の、成長の様子を一枚のカードに記入し「健康連絡票」をつくりました。子ども達が努力した健康の記録がのっています。

それを見て、自分の変化に気づき、努力をした子ども達がありました。

体のこと、健康のこと、自分のこととしてとらえる子ども達が育っていました。

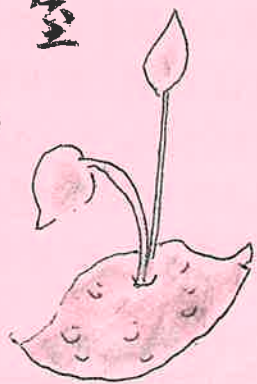


どの子も どんなことも (4) 土岐満子

14

保健室 は自分を 知ろう

とこころ



子ども達、昼休み保健室に来て身長をはかったりしながら、からだや健康のはなしをします。

保健室では、からだのこと、自分のことをたしかめたり学んだりする場に、なっています。保健のこと、からだのことを書いた本をおきました。

15

はじめて 保健だより をつくりました

子どもたちのようすや保健のとりくみを父母に伝えるために、「ほけんだより」をつくりました。

ロウのついた紙に、ガリ版の上で鉄筆で書く方法です。ガリガリと音がします。

ガリ刷りという言い方をしました。

印刷すると手に黒い油がついたことを思い出します。

